

Title	稻のきた道
Sub Title	On the route of spread of rice culture to Japan
Author	江坂, 輝彌(Ezaka, Teruya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1973
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.45, No.4 (1973. 10) ,p.43(403)- 48(408)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19731000-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

稻のきた道

江坂輝彌

序 最近までわが國への稻の伝播系路は少くとも朝鮮半島の南部を経由し、弥生文化成立の諸要素とともに、弥生文化成立の直前、半島東南部から西北九州地方への道がとられたとする考え方が常識化していた。ただこれに対しかつて民俗学者柳田国男先生などは民俗学の立場から南西諸島方面から南九州地方へのルートを考えられたことがあつたが、この方面からの考古学的資料には有力な手がかりが発見されぬまま考古学者の間からは新見解も出ぬまま今日までほとんど省りみられなかつた。

しかし一方西九州地方で縄文文化後期末には稻作がおこなわれていたのではないかとする意見が、一九五八年六月川上勇輝氏によって「熊本史学」に発表された。⁽¹⁾この資料は一九三二年四月、熊本県菊池郡大津町杉水小字西の原通称ワクド石地内の桑畠で、桑の枝根を掘取り作業中、発掘された御領系浅鉢口縁部破片の、口頸部内面に玄米の圧痕のある土器で、当時は地元の考古学資料蒐集家川上氏の手許に氣づかれぬまま保存されていた。この資料が一九五七年七月川上氏宅を訪れた松岡史氏によって注意されるところとなり、松岡氏より森貞次郎博士にこの話が伝わり、標品の土器片は森博士から九州大学農学部育種学教室の永松土己教授の許に鑑定のため提出され、玄米の圧痕であることが判明した。またこの土器片は多くの専門研究者の手で検討された結果、後期末の御領式ではなく、晩期初頭の黒川式であろうということになつ

た。しかし縄文文化晚期初頭（約三〇〇〇年前）に熊本県北部の菊池郡方面に稻が存在したことは動かしがたい事実となつたわけである。

黒川式土器片に糊殻圧痕らしきものが認められるものは乙益重隆教授によると長崎県国見町百花台遺跡発見のもののか数例が知られているという。

その後長崎県島原半島では礫石原、山ノ寺、原山などの晚期の山ノ寺式土器出土遺跡で糊殻圧痕のついた土器片、炭化米の発見があり、西北九州地方に縄文文化晚期に稻作が始っていたと見てさしつかえないと思われるようになった。

弥生文化成立以前に稻がわが西北九州の地に渡来し、その栽培が開始されていた事実が認められれば、従来の常識的見解には大きな訂正が必要であり、その伝播系路も朝鮮半島経由でなく、長江南部の浙江省方面からの直接渡来とするならば、この点も従来の見解とは全く異ったものとなる。岡崎敬教授は一九六八年、朝鮮学報誌上に発表の論考⁽²⁾で、長江南部の地から直接のわが国への渡来であればジャポニカ型（粳）のほかインディカ型（籼）もわが西北九州の遺跡から発見されるべきであるとし、筆者の見解⁽³⁾に否定的な立場をとられた。

本稿ではわが日本への稻穀と稻作技術の伝播系路について、近年の研究成果により、今一度再検討を加えてみたいと思つた次第である。なお今回は紙数の都合と筆者に時間の余裕もないまま、その大要を簡略に紹介するに止めた次第であり近く稿を改めて詳論したいと思っている。

本論 稲が中国の華北から東北地区の南部を経て、朝鮮半島の西海岸を南下し、西南海岸平野から洛東江デルタ地域に到達し、わが西北九州へ伝播したとする説は、農学の育種学上から見て到底考えられぬことであるとされ、山東半島突端部から朝鮮半島西岸へのコースも無理で、許容圏内は淮河の南部平野から半島西南部へのコースで、育種学的立場から最も妥当性の強いのは長江南岸の浙江省方面から、わが西九州、濟州島、半島西南端部へのコースであるという。⁽⁴⁾

これに続いて一九七〇年、岡山大学農業生物研究所の笠原安夫教授は、大阪府立大学で開催の日本作物学会の大会で、岡山市津島遺跡の板付Ⅱ式の水田址で、水田に生育する雑草の種子など九十八種を検出され、この中に東南アジアの原産地付近の低湿地に生育する雑草がかなりあり、西九州に弥生文化前期初頭に稻穀が伝来し、栽培が開始されたとするならば水田雑草が急激に広まつたことになり、このようなことはあり得ないことで、稻の渡来はこれよりさらに数百年遅った時代と考へることが妥当であるとされ、縄文文化晚期初頭の渡來說を支持されている。そしてこれらの東南アジア産の水田雑草のあるものは、長江以北には見られないものであるといふ。⁽⁸⁾

農学間係の多くの研究者の成果が長江南部よりの渡來を妥当としているのに対し、わが国の縄文文化晚期、弥生文化遺跡出土の米がジャポニカ（粳）のみで、インディカ（籼）がないという理由から、途中に一つの中継地を置き、ここで何等かの理由で籼の栽培が不可能となり、わが国へは粳のみ渡來したとする考えは机上プランとしては、全く適切な名案であるが、生態学的なこの謎はかなり違つた点にあり、私は浙江省北部からの渡來と考えたい。

朝鮮半島の考古学的調査、研究はわが国に比較すると、まだまだ遅れており、韓国西南部の湖南地方では今後どのような発見があるか予測もつかぬような状況にあるが、一九五八年頃以降、韓国における古代遺跡の調査研究には飛躍的な発展があり、開発工事に伴う緊急調査も各地でおこなわれ、金元龍教授などによつて出土無文土器などについては夥しい量のものが水洗整理の段階で、糊痕あるものはないかとかなりの注意が払われているにかかわらず、今日まで一片の糊殼圧痕ある土器片の発見もないし、また炭化米粒の出土も報告されていない。朝鮮半島で先史時代遺跡から炭化米を発見したのは一九二〇年、京都大学考古学教室の浜田耕作博士らが慶尚南道金海邑会峴里貝塚発掘調査の際に出土したものが今日知られる唯一の例である。⁽⁵⁾

このように見てくるとわが日本の出土例に比較し、皆無に等しい状況であることがわかる。

朝鮮半島においては水稻耕作より早く、半島全域に先ず粟、黍、稗の類の栽培が始っていたものと考えられる。BC三〇〇年代の櫛目文円底深鉢形土器出土遺跡から発見されているサドル形石皿、細長いカマボコ形磨石はこれらの雑穀の製粉用具と見なされる。また多量に出土する長方形の打製石器は刃先両面の磨滅が甚しいものがあり、掘り棒の先端につけられた土掘り具と考えられる。

平壌近郊の智塔里遺跡⁽⁶⁾では櫛目文土器の末期に近い遺跡から粟か稗と思われる穀類の炭化物の出土が報告されている。

半島において粟、黍、稗などの雑穀栽培が以外に早く、無文土器の時代に入ると庖丁形磨製石器（石刀）、片刃扁平磨製石器など我が国の弥生文化を特徴づける石器と同様な一群の磨製石器類があらわれる。これらの磨製石器類とともに中国の東北地方から伝播した穀類は粟、黍、稗などの雑穀に続く、大麦、小麦類以外には考えられない。これらの作物が半島全域に拡がったのは、わが縄文文化中期後半から後期初頭の頃で、かなり早い時期である。花崗岩、斑勵岩などを基盤とする山地の連る、比較的乾燥地の多い半島では、気候環境と併せて、麦作には適地であったと思われる。

このような半島の南部の一部に（全羅南道、慶尚南道）水田耕作の適地が所在したが、BC一〇〇〇年前後（縄文文化後期末）に中国の長江南部地方から水田耕作の技術と稻の渡来があつても、先に拡がった雑穀、麦類を圧倒して、それらの地域へ滲透するだけの魅力ある作物ではなかつたと思われる。低湿地の開拓による水田耕作は、麦作以上の労力の必要性もあり、麦作の滲透地域へ進出するだけの希求性はなかつたのではなかろうか。

恐らく半島東南部に縄文文化中期末から後期にかけて佐賀県産と思われる黒曜石の伝播に伴つて、縄文土器が僅かに使われていたのとほぼ同じような現象で、西北九州地方に弥生文化成立の前後に、半島南部から西北九州地方へ強い文化の波及があつたことは疑ない事実であり、その余波で西北九州で定着し始めた水田耕作の技術と稻が洛東江デルタ地帯に逆に波及したということも考えられそうである。

従つて朝鮮半島全域に拡がる庖丁形磨製石器、片刃扁平磨製石器、太形蛤刃磨製石斧、方柱状抉入磨製石斧など弥生文化に特有の石器が半島東南端部からわが国へ波及し、その際これらとともにわが国に渡來した穀類があつたとすれば米以外のものであり、BC三世紀代における弥生文化の成立とともに前記の磨製石器類と渡來した新しい穀類は恐らく大麦と小麦ではなかつたかと推察される。弥生文化前期の西日本の遺跡から大麦、小麦の炭化物の発見は、最近一、二にとまらぬ数報告があり、今後の精密な調査により麦のノギ、葉などの炭化物の発見もかなり多く期待できそうである。

最近、金元龍教授が半島における庖丁形磨製石器の発生とその分布圏に関する論考を發表されたが⁽⁷⁾、庖丁形磨製石器は半島北辺部の感鏡北道、平安北道などの稻作圏外からも多数の出土例が知られ、朝鮮半島という地域を限定して考察しても、この種石器が稻の穗づみ具として発生したものでないことは明らかである。

稻の来た道はこのように考えると盛永俊太郎、笠原安夫博士らが農学の面から指適されたように縄文文化後期末頃、長江南部から東支那海を越えて西九州地方への直接ルートが最も適切なように考えられてくる。

縄文文化後・晩期の遺跡から出土の瓢箪、梶なども、西アフリカのニジェール地方、ビルマ山地などが原産の植物で、瓢箪は東北アフリカ、インドを経て東南アジアにはBC四〇〇〇年代に到達しており、梶も纖維布、タバの原料として早くより各地へ移植がおこなわれたものである。しかしこれらの植物も華北、朝鮮半島北半經由のルートは気候環境から見て到底考えられぬことである。

縄文文化前期末以降、中期前半の頃、またそれ以後に中国大陸北部が今日より暖かな気候環境であつたことが、最近の考古学報誌上に報告されている⁽⁹⁾が、この程度の気温の上昇では前記した植物が、華北北部から東北地区へとの伸張は困難であつたと思われる。

東支那海渡海説に対しても、遣唐使の航路としても、最初はこの難航路は利用されなかつたことなどを考え、考古学者

の間には反対する向きも多いが、海流に乗り、波浪のおだやかな折りには、浙江省杭州方面から九州の五島列島を目指す航路は比較的容易であることは、海を知るものは誰しも理解できるところである。しかし海流の流れを逆に進む西九州から長江南部へのルートは、海流の流れをはずし、風力の利用が必要であり、かなりの航海術をもたなければ難しいルートである。

縄文文化前期末における漆、刺青、洗骨葬などの習俗の渡来ルートもこのルートであり、これに続く、瓢箪、梶などの植物渡来もこのルートより考えられず、稻より早くこのルートで渡来した文物が五指を屈する以上に多いことから考えても、筆者は稻および稻作技術がわが日本列島への伝播系路は江南地方から西九州へ、東支那海を渡った系路であると確信する。詳細は稿を改めて論じたい。

註

- (1) 川上勇輝 米の圧痕をもつ縄文末期の土器 — 菊池ワクド
石出土の土器報告 — 熊本史学第十四号 36~37頁 一九五八年六月
- (2) 岡崎敬 日本における初期稻作資料 — 朝鮮半島との関連
にふれて — 朝鮮学報第四十九輯67~87頁 一九六八年十月
- (3) 江坂輝彌 稻作文化伝来に関する諸問題 考古学雑誌第五二卷第四号二三八~二四四頁 一九六七年三月
- (4) 盛永俊太郎編 稻の日本史一~五ほか(一九六九年、筑摩書房の筑摩叢書、上、下二巻として再刊)
- (5) 浜田耕作・梅原末治 金海貝塚発掘調査報告 大正九年度
古蹟調査報告第一冊 朝鮮総督府 一九二三年 第九節 自九七二年第一期 一九七二年一二月
- (6) 都宥浩 智塔里原始遺跡発掘報告 遺跡発掘報告第八集
一九六一年
- (7) 金元龍 韓国半月形石刀の発生と展開 史学志第6輯 檀國大学校史学会刊 一九七二年一一月
- (8) 笠原安夫 一九七〇年一一月三日、大阪府立大学で開催の日本作物学会での発表
- (9) 笠可楨 中国近五千年来氣候變遷的初步研究 考古学報一